

## 教材「故郷」の語彙研究

河 内 昭 浩

*Kokyo Teaching Material for Vocabulary Research*

Akihiro KAWAUCHI

### 1. 研究の目的

「定番教材における指導すべき語彙の検証」をテーマに、これまでに以下の論考を発表してきた。

- ・河内 (2012) : 教材「羅生門」の語彙研究 (『安田女子大学紀要』第40号)
- ・河内 (2013a) : 教材「オツベルと象」の語彙研究 (『国語国文論集』第43号)
- ・河内 (2013b) : 教材「走れメロス」の語彙研究 (『安田女子大学紀要』第41号)

いずれにおいても、(1) 脚注欄に示された語句の妥当性の検証、(2) 形態素解析による教材本文の語彙分析、(3) (1)、(2) により把握した、教材文の語彙の特徴を生かした授業展開案の作成、を行っている。こうした考察は、筆者も参加した、言語政策班<sup>1</sup> (代表: 国立国語研究所, 田中牧郎氏) による、国語政策、国語教育分野への言語コーパスの活用研究を緒としている。コーパスとは、研究用の情報の付与された大規模な言語のデータベースを指す。コーパスの客観的なデータを用いて、国語教育の内容と方法を検証する提言を、班のメンバーとともに、現在も続けている。

定番教材とは一般に、長期間にわたり教科書に掲載されている教材を指す。長く教科書教材となっている以上、当然ながら多くの教材研究、実践報告がなされている。しかし田中 (2011) によれば、「語彙指導という観点から教科書や教師用指導書を見る限り、学習すべき語句あるいは指導すべき語句として指示されているものについて、語句の何を学習すべきなのか、どのような観点で指導すべきなのか明示されていないものが多い」。こうした点を解消し、定番教材において指導すべき語彙を、エビデンスのあるデータをもとに選定することを研究の目的としている。加えて、語彙の特徴を生かした教材文の指導法を提示することで、定番教材に新たな指導法の光を照射したいと考えている。

本稿においては、これまでの論考と同様に、脚注欄の語句の検証と教材文の語彙分析を行う。特にこれまでの研究の最大の着眼点であった脚注欄の語句を中心に考察する。ただその前に、こ

---

1 言語政策班は、特定領域研究「日本語コーパス」(代表: 国立国語研究所, 前川喜久雄氏) 内のプロジェクト・チームの一つ。その成果は、田中牧郎他 (2011) 『言語政策班報告書 言語政策に役立つ、コーパスを用いた語彙表・漢字表等の作成と活用』にまとめられている。以後、本稿で用いるコーパス、語彙表、並びにそれらデータの詳細な説明は本書に全て収められている。引用した田中 (2011) も本書所収の論文を指す。田中 (2011) 『『少年の日の思い出』の語彙指導』

れまでの研究で浮かび上がった課題を整理しておきたい。

## 2. 脚注語句の分類

これまで特に、教科書の脚注欄に着眼してきた。それは、次のような現象から生じる問題意識からであった。

- ・同一教材でも、教科書によって脚注欄で取り上げられる語句が異なる。
- ・脚注欄での取り上げられ方が、教科書によって異なる。

脚注欄には、文やイラストなどで説明の施される語句（以下、「注釈語句」と呼ぶ）と、意味調べや類義語・対義語調べ、短文作成などの学習が促されている語句（以下、「学習語句<sup>2</sup>」と呼ぶ）が配置されている。それらが、教科書によって個々別々なものになっている。扱われる語句が異なるのみでなく、扱われ方、注釈語句とするか学習語句とするか、まで異なる語句もある。こうした現象は、語彙指導の体系がいかにか未整備であるかの証左と言えるだろう。そもそも、教材で指導すべき語彙とは何かということ自体、議論が深まっているとは言えない<sup>3</sup>。

改めて、脚注欄に示すべき語句、注釈語句と学習語句、について整理する。それらは以下のよう分類できると考えている。教材「故郷」の語例とともに下記に示す。

- (ア) 通常の辞書に掲載されていない固有名詞等…例えば、「チャー（穴熊に似た動物）」など。外国語（中国語）であり、また表記（けものへんに査）も作者の造語とされている。こうした語は、注釈を施す以外に学習者に理解をさせる方法はない。
- (イ) 辞書に掲載されている意味とは別の、作品固有の意味を内包している語句…例えば、「二千里の果て」など。「里（り）」の意味を辞書で調べることはできる。しかし、日本の単位の「里」とは長さが異なり（中国の1里は約500メートル）、加えてここでは、具体的な距離ではなく、「はるか遠く」であることを意味している。こうした語も、(ア) 同様に、注釈を施す以外にはない。

上記の(ア)、(イ)のような語に注釈をつけることについては、異論はないだろう。上記の例の「チャー」も「二千里の果て」も、「故郷」を掲載している4社全ての教科書で、注釈語句として脚注欄に示されている。しかし例えば、後に一覧表を示すが、「旧暦」、「ナポレオン」、「ワシントン」という語は、4社中、2社が注釈語句として提示、2社が提示無しと判断が分かれている。また「偶像崇拜」という語は、4社中、2社が注釈語句として提示、1社が学習語句として提示、もう1社が提示無しと判断が各社で異なっている。さらに学習語句の中には、教科書に

2 河内（2013b）ではこれを「注意語句」と呼んだ。しかし、「注釈語句」と紛らわしく、また「学習語句」の方がより脚注欄に示す語句の特徴を表していると考え、本稿以後はこれを「学習語句」と呼ぶこととする。

3 これまでの語彙指導の成果については、塚田泰彦・池上幸治（1998）『語彙指導の革新と実践的課題』（明治図書）に詳しくまとめられている。そこでも、語彙指導不振の現状が嘆かれているが、10数年経った現在も、その状況に変化はない。

よって扱う語句が分かれているものも多い。これらの語についてはどのように考えればよいだろうか。

「旧暦」は作品において、主人公たちが、故郷に別れを告げなければならない時期を示す語句と関わっている（「旧暦の正月の前に、住み慣れた古い家に別れ<sup>4</sup>」）。また、旧暦を使用しているという事実から、学習者は時代が現代ではないことを理解することができる。加えて、この「旧暦」のほか「節季」、「閏月」といった、古来の暦、季節に関わる語が作品中には見られる。ちなみに「節季」は全4社で注釈語句として、「閏月」は4社中3社で注釈語句として取り上げられている。歴史背景を背負った語を国語科で教えることは、伝統的な言語文化の継承といった観点からも重要なことである。こうした語は、作品読解に必ず必要とまでは言えなくとも、脚注欄で注釈語句として取り上げるべき語句である。

一方、「ナポレオン」、「ワシントン」の語は、「ヤンおばさん」という、故郷でかつて近隣に住んでいた女性の、自分のことを忘れてしまっていた主人公「私」への不服の気持ちを表す描写で用いられる（「まるで、フランス人のくせにナポレオンを知らず、アメリカ人のくせにワシントン知らぬのを嘲るといった調子で」。「故郷」は言うまでもなく、フランスやアメリカの話ではない。「ナポレオン」、「ワシントン」の語も、作品中この一度きりの出現である。この2語を正しく理解しなければ、「ヤンおばさん」の性格や場面全体を理解できないとは言えない。作品読解に必ずしも必要と言えないこの2語を注釈語句として示す必要はない。注釈語句として提示する語句は、先の「旧暦」のような伝統的価値を持つ語を除き、基本的には作品読解に必要な語であるべきである。

しかし一方この2語は、データは後に示すが、社会科の教科書を中心に、教科書での出現頻度が高く、また一般社会での出現頻度も高い。学習者が、他教科での学習を理解する上でも、また社会生活を送る上でも知るべき語と言える。こうした語は、学習語句として示すのが適切であると考えられる。意味調べ等のための学習語句は当然ながら、他教科の学習や社会生活で必要であると判断できる語でなければならない。その必要性こそが、学習語句として提示して、例文作成等を行わせ、学習者自身の語彙として習熟させることのものである。ただそのように考えると、「ナポレオン」、「ワシントン」が学習語句として本当に必要な語句であるかには留保が付く。社会科の学習との連関を図る上では必要な語句と言える。しかしこれら固有名詞は、生活に必要な語句と言えない。学習語句全体の体系、量を勘案し、判断していく必要がある。

また一方、「偶像崇拜」の語は、結末部の主人公「私」の独白の中で使用される。

たしかルントウが香炉と燭台を所望したとき、私は、相変わらずの偶像崇拜だな、いつになったら忘れるつもりかと、心ひそかに彼のことを笑ったものだが、今私のいう希望も、やはり手製の偶像にすぎぬのではないか。ただ、彼の望むものはすぐ手に入り、私の望むものは手に入りにくいだけだ。

「偶像崇拜」、「偶像」の語は「希望」、「望むもの」という語とともに用いられている。故郷に失望する一方で新しい生活を望む「私」の、新しい生活と希望を手に入れる難しさ、あるいは新しい生活そのもの、希望そのものが、「偶像崇拜」、「偶像」という言葉で表現されている。「偶像崇拜」は、あるとも知れぬ新しい生活、希望に今後を託していこうとする、物語結末部の主人公

4 引用する本文、並びに解析に用いた本文には、平成25年度使用の光村図書出版の教科書（『国語3』）を使用した。

の心情と直接関わる重要な語である。作品理解に必要という観点からは、注釈語句とすることも考えられる。しかしまたこの語は、一般社会での頻度も低くない。つまり作品理解に必要な語であるとともに、学習者が実生活の中で理解、使用できるようになってほしい語でもある。こうした語は、学習語句として提示し、作品理解とともに学習者の日常の使用語彙としての定着を促すべきであろう。

また一方、一般社会での頻度が低く、学習者が理解できないと考えられる語句がある。それらの語句の意味調べをさせるための学習語句も必要である。つまり学習語句は、一般社会での重要度によって、使用語句と理解語句に分かれる。それぞれ明確な意図を持って提示する必要がある。

以上の観点をもとに、さらに脚注欄に示すべき語句を分類すると以下の通りになる。

- (ウ) 作品を理解する上で必ずしも必要とまで言えなくても、文化度の高い語…例えば「旧暦」など。注釈語句として示すべきである。
- (エ) 他教科の学習や社会生活での重要度が高い語…例えば、「偶像崇拜」など。類義語・対義語の学習や、例文作成のための語句（使用語句）として示すべきである。
- (オ) 他教科の学習や社会生活での重要度が低い語…例えば、「寂寥」など。意味調べの学習のための語句（理解語句）として示すべきである。

また（ア）～（オ）の観点を表にまとめると以下のようになる。

	読解に必要	辞書に有る	社会で必要	その他
(ア) 注釈語句	○	×	×	注釈なしには読めない
(イ) 注釈語句	○	○	×	作品固有の意味を含む
(ウ) 注釈語句	△	△	△	文化度が高い
(エ) 学習語句	△	○	○	使用語句
(オ) 学習語句	△	○	△	理解語句

学習語句については今後さらなる検討、考察が必要であると考えている。全ての語句を学習語句として取り上げることはできない。漢字とともに、語彙指導の体系をつくり、小・中学校の各学年、高等学校の各科目で指導すべき漢字・語彙を明らかにして、その上で、各教材で取り上げるべき語句を定めていかなければならない。また、文学教材で学ぶべき語と、実社会で必要とする語とを同一に扱ってよいのか、そもそも文学教材で学ぶべきことは何であるかといった、根本的な問題についても考究していく必要があるだろう。現状では、どの教科書でも、文学教材、論説文教材、双方に学習語句は配置されている。本稿でも、学習語句を取り扱うことを前提に論を進めているが、その前提に対する問いかけを常にしていかなければならないと考えている。

いずれにせよ、コーパスという客観的な指標を用いることで、指導すべき語句の検証を行うことができるようになった。なお、使用するコーパス並びに語彙表は以下の通りである。

・「現代日本語書き言葉均衡コーパス」

書籍・新聞・雑誌・web上の文書まで、幅広く日本語の書き言葉を対象とした、均衡コーパ

ス。国立国語研究所のホームページにて公開。<http://chunagon.ninjal.ac.jp/>

・「教科書コーパス」

小・中・高等学校の全教科の教科書の全文コーパス。2005年度使用の教科書をもとに言語政策班にて作成。非公開。

・「学校・社会対照語彙表」

「現代日本語書き言葉均衡コーパス」, 「教科書コーパス」の語彙頻度の情報を結合させた語彙表。教科書, 並びに一般社会での語彙の頻度状況を知ることができる。

現在, 2013年度使用の教科書をもとに, 「新教科書コーパス」を作成中である(科研費基盤研究C「他教科と社会に資する漢字・語彙指導法の確立」H25～H27)。さらに今後, 新教科書コーパスをもとに, 「学校・社会対照語彙表」のデータも更新していく。

### 3. 教材「故郷」について

「故郷」が中学校国語科教科書に初めて掲載されたのは, 1953(昭和28)年のことである<sup>5</sup>。以来絶えることなく, 主に中学第3学年の教科書に掲載され続けている。現在も, 中学校国語科教科書全5社中4社で掲載, 1社で「別冊・資料編」での掲載<sup>6</sup>となっている。

主人公の「私」が, 家財の整理のために長く離れていた故郷に帰る。記憶の中の美しい故郷の姿はそこにはなく, 疲弊した農村の姿, 人々がそこにあるばかりである。かつて心を交わした, 「私」にとって畏友ともいえる, 奉公人の子どものルントウと再会を果たすも, 今はもはや主従の厚い壁があるばかりであった。甥とルントウの息子がかつての自分たちのように心を通わすさまに希望を見つつ, 「私」は故郷を後にする。

過去と現在それぞれの「私」とルントウ, それに母やヤンおばさんなどの人物像が丁寧に描かれている。また農村の生活の様子や, 幼い「私」とルントウの遊ぶ様子なども視覚的にとらえやすく表現されている。これまで長く文学教材で行われてきた, 登場人物の心情や情景描写の読み取りを学習者に行わせるのに, 適した教材であると言える。また発展的に, 20世紀初頭の中国と, 作者自身の状況を教えていく中で, 主人公の悲しみが単なる個人の感傷にとどまらず, 社会的メッセージを有していることに気付かせることも, 中学第3学年の学習者たちには可能であろう。

そうした心情や情景, 時代背景をつかむために必要な語彙を, また学習者の使用・理解のための語彙を学習の対象として選定する必要がある。

### 4. 注釈語句・学習語句一覧表

「故郷」の注釈語句と学習語句の一覧表を提示する。なお, 本一覧表をはじめとした一連の語彙表の作成方法は, 河内(2013b)等と同様である。語句は全て, 「故郷」を掲載している中学校教科書会社4社(A社～D社)の, 脚注欄にある語である。注釈語句を「○」, 学習語句を

5 日外アソシエーツ(2008)『読んでおきたい名著案内 教科書掲載作品13000』による。

6 本稿では, 授業の教材として扱うことを前提としているため, 「別冊・資料編」での掲載については扱わない。

「●」で表記している。

[注釈語句(○)・注意語句(●)一覧表]

	語句	A社	B社	C社	D社	中高	LB
1	二千里の果て	○	○	○	○	36	b
2	二十年				○	-	-
3	苦	○	○	○	○	3	d
4	わびしい	●			●	6	c
5	覚えず		●			-	-
6	寂寥		●		●	3	d
7	込み上げる	●				7	b
8	片時			●		1	d
9	長所				●	53	b
10	進歩				●	198	a
11	心境	●	●			5	b
12	一族で住む	○			○	-	-
13	旧暦	○			○	11	c
14	異郷			●		6	d
15	やれ茎	○	○	○	○	2	-
16	説き明かし顔			●		1	e
17	ひっそり閑			●		1	-
18	やるせない	●	●	●	●	3	d
19	かさばる			●		3	d
20	脳裏		●			6	b
21	紺碧			●	●	2	d
22	刺叉		○	○	○	3	e
23	チャー	○	○	○	○	-	-
24	身をかわす			●		-	-
25	そこそこ			●		3	b
26	雇い人			●		1	d
27	節季	○	○	○	○	2	e
28	年貢			●		96	e
29	閏月	○	○		○	2	e
50	筋向かい				●	2	e
51	(豆腐屋)小町	○	○	○	○	4	e
52	不服	●				4	b
53	蔑む	●				3	d
54	ナポレオン		○		○	94	b
55	ワシントン		○		○	72	b
56	嘲る	●	●			6	c
57	冷笑	●	●	●		1	c
58	どぎまぎ		●	●		2	d
59	八人かきのかご				○	-	-
60	(行きがけの)駄賃			●		1	d
61	応対			●		6	b
62	似もつかない			●		-	-
63	節くれ(だつ)			●		1	e
64	思案	●	●	●	●	7	b
65	数珠(つなぎ)		●	●		4	c
66	うやうやしい	●	●	●		5	c
67	おどおど		●			1	c
68	他人行儀			●	●	-	-
69	減相		●	●		1	e
70	わきまえ		●			1	-
71	はにかむ	●				2	d
72	ろくな				●	4	b
73	物騒	●				3	c
74	放題		●			3	b
75	作柄			●		2	e
76	元(はきれる)			○	○	1240	a
77	すべ		●	●		5	b
78	境遇	●	●	●		15	b

30	かたわら	●				21	a	79	兵隊, 匪賊	○	○	○	○	-	-
31	五行 (の土)	○	○	○	○	18	c	80	寄ってたかって	●	●			-	-
32	溺愛			●	●	1	d	81	香炉	○	○	○	○	6	d
33	願を(かける)			●		4	d	82	燭台	○		○	○	4	d
34	人見知り			●		-	-	83	とりとめもない	●	●	●	●	4	c
35	城内	○	○	○	○	-	-	84	がてら		●	●		1	d
36	タオチー他	○	○	○	○	-	-	85	ひたすら		●		●	39	a
37	鬼おどし他		○	○	○	-	-	86	たそがれ			●		3	c
38	獐猛			●	●	0	e	87	胸をつく	●	●	●		-	-
39	高潮				○	5	-	88	纏足	○	○	○	○	3	e
40	跳ね魚				○	-	-	89	名残 (惜しい)	●		●		22	b
41	中庭				○	25	b	90	気がめいる	●	●	●		-	-
42	ことづける	●				2	e	91	面影		●			16	b
43	一挙に		●		●	21	b	92	慕う		●			5	b
44	戸外				●	5	b	93	打ちひしぐ	●	●			1	e
45	目をやる			●		-	-	94	野放図	●	●	●	●	1	d
46	口実		●	●		16	b	95	所望		●	●		1	c
47	(五十)がらみ			●		1	c	96	偶像崇拜		○	●	○	13	c
48	スカートを～	○	○		○	-	-	97	心ひそかに			●		-	-
49	口添え			●		1	d	98	まどろむ		●			5	d

表の項目の「中高」は、「教科書コーパス」中の、中学校及び高等学校の全教科の教科書中の出現数を示している。また「LB」は、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」を構成するサブ・コーパスの一つである、「図書館サブ・コーパス」の語彙のレベル (a～e) を指す。このLBの語彙レベルは、実社会での重要度を測る指標である。教科書での頻度の高い語、及びLBのレベルの高い語は、類義語・対義語や例文作成の対象として、学習語彙として名を連ねるべきである。一方、教科書での頻度が低く、またLBのレベルの低い語は、意味調べの語句として学習語句に名を連ねるべきである。ただし先に述べたように、それらを取り上げるべきかどうかを、全体の中で判断していく必要がある。

全98語中、全社共通の扱いの語句 (すべて○かすべて●) は、下記の16語のみである。

注釈語句 (○) : 二千里の果て, 苫, やれ茎, チャー, 節季, 五行の「土」が欠けている  
 城内, タオチー他, 豆腐屋小町, 兵隊・匪賊他, 纏足  
 学習語句 (●) : やるせない, 思案, とりとめもない, 野放図

また既に述べたように、「偶像崇拜」の語は扱いが教科書によって分かれている。このような

教科書による相違をただし<sup>7</sup>、指導すべき語彙を選定していく必要がある。

上記の語彙を先に示した(ア)～(オ)の観点に照らして分類すると以下のようになる。

- (ア) [注釈語句：辞書で対応できない語] やれ莖, チャー, タオチー・チアオチー・ランペイ, 鬼おどし・観音様の手, 跳ね魚, 豆腐屋小町, 元<sup>8</sup> (はきれる)
- (イ) [注釈語句：作品固有の意味] 二千里の果て, 二十年, 一族で住む, 刺叉, 城内, スカートををはかないズボン姿, 兵隊・匪賊・役人・地主, 纏足,
- (ウ) [注釈語句：文化語] 苫, 旧暦, 節季, 閏月, 五行, 八人かきのかご,
- (エ) [学習語句：使用語句] わびしい, 込み上げる, 長所, 進歩, 心境, 脳裏, そこそこ, かたわら, 中庭, 一挙に, 戸外, 口実, (五十) がらみ, 不服, ナポレオン, ワシントン, 嘲る, 冷笑, 応対, 思案, 数珠 (つなぎ), うやうやしい, おどおど, ろくな, 物騒, 放題, すべ, 境遇, とりとめもない, ひたすら, たそがれ, 名残 (惜しい), 面影, 慕う, 所望, 偶像崇拜,
- (オ) [学習語句：理解語句] 寂寥, 片時, 異郷, 説き明かす, やるせない, かさばる, 紺碧, 雇い人, 年貢, 溺愛, 願をかける, 獯猛, 高潮, ことづける, 口添え, 筋向かい, 蔑む, どぎまぎ, (行きがけの) 駄賃, 節くれ (だつ), 滅相, わきまえ, はにかむ, 作柄, 香炉, 燭台, がてら, 打ちひしぐ, 野放図, まどろむ
- \* 該当なし<sup>9</sup>: 覚えず, ひっそり閑, 身をかわす, 人見知り, 目をやる, 似もつかない, 他人行儀, 寄ってたかって, 胸をつく, 気がめいる, 心ひそかに,

注釈語句は言うまでもなく、注釈を必要とする語句である。特に(ア), (イ)に列挙した語句は、読解に注釈が必要な語句であり、本来、教科書会社の違いに関わらず、共通であるべきである。しかし先に表で示したようにそのようにはなっていない。またここで学習語句に分類した「中庭」, 「香炉」, 「燭台」(いずれも下線部の語句)は、教科書では注釈語句とされている。しかしいずれも通常の辞書で調べることが可能であり、かつ、読解上必ず必要な語句であるとは言えない。

このように明確な判断基準のもとに、脚注欄の語彙は選定されるべきである。そして同一の教材が同一の学年に配置されている以上、本来扱う語彙は、どの教科書においてもほぼ共通である

7 教材の配列や学年によって、扱う語句は変わってくる。従って各会社の教科書で全て同じ語を脚注欄に示す必要があるというわけではない。しかし注釈語句については、その性質上ほぼ同じであってよいはずである。学習語句については、そもそも語彙の体系そのものができていない。各校種において指導すべき語彙の全体像を構築する必要がある。

8 C社の教科書では「元…もとね。原価。」と注釈が付けられている。この意味を学習者が辞書で確認することが可能である。しかし、「元はきれる」という表現・表記は、通常の辞書には見られない。「広辞苑」には同様の意味で、「本が切れる」とあるのみである。また「教科書コーパス」にも、また語彙レベルの対象である「図書館サブ・コーパス」にも、「元はきれる」という表現・表記は一件も見られない。したがってここでは、「注釈語句」として分類した。

9 該当なしの項目に挙げた語句は、いずれもコーパスによる判定ができなかったものである。コーパスは短単位の単語を一語としているため、教科書コーパスでの頻度や、語彙レベルを判定することができない。ただし、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」は、「中納言」や「NINJAL-LWP for BCCWJ」のシステムを用いて、連語の頻度を調査することが可能である。河内(2013b)では慣用表現の数を「中納言」を用いて算出しているが本稿では取り上げない。



べきである。文学教材として、「読むこと」領域に関する読解の目標がほぼ同一であることと同様でなければならない。

### 5. 「故郷」本文の語彙分析

ここまでは、既に脚注欄に示された語句について検証してきた。次に、「故郷」本文の語彙分析の結果から、今後新たに脚注欄に示すべき語句について検討したい。

語彙レベルの低い語（～d）の主な語句を下記に示す。これらは、意味調べが必要な学習語句、あるいは注釈が必要な語句となりうる可能性のある語句である。括弧内は「教科書コーパス」における出現数を表している。

レベル LB	「故郷」の語彙（～d）
-	屑朮(1), 滑っこい(1), 大秤(1)
e	候(16), 鉛色(2), なじみ深い(1), 買い足す(1), 暮らし向き(4), 毛織(7), 穴熊(2), はりねずみ(1), 製図(20), 出かかる(2), 青豆(1), 燃す(1), じれる(2)
d	折から(2), 荷造り(2), 日取り(2), 植わる(1), 大祭(2), 祭器(4), つなぎ止める(4), 結わえる(3), 待ち遠しい(4), 通りがかり(4), 電光(3), 頬骨(2), 持ち運び(8), 潮風(2), 古ぼける(1), 薄手(4), 綿入れ(1), 紙包み(2), 血色(4), ひび割れる(4), せき止める(9), 薄墨(22), 船尾(1), おととい(1), ついばむ(2), 通い合う(3), すり減らす(1)

上記の語の中から、脚注欄への提示を検討すべき語句について述べていく。

「屑朮」(-)の語は、「私」の幼少期の回想の中で、レントウが「私」に鳥の捕り方を説明する場面で使われている（「大きな籠を持ってきて、短いつっかえ棒をかって、屑朮をまくんだ」）。この場面をはじめ、貝殻捕りやスイカの番について少年レントウが「私」に話す場面は、描写が大変具体的で、魅力的である。生き生きと話すレントウに「私」は惹きつけられ、同時に読者も惹きつけられる。「私」のかつての故郷への思いも含め、情景を把握する上で、レントウの会話を適切に理解させる必要がある。屑朮をまいて捕る「タオチー」などの小鳥は想像するしかないが、鳥を捕る行為については学習者に具体的にとらえさせたい。そのために、「屑朮」という語には注釈が必要であると考えられる。「屑朮」の語はコーパスにはない。「朮」はあるが、語彙レベルはdでこちらも高くない。そもそも現代の多くの子どもたちに、米の収穫に関わる語が注釈なしに伝わるとはおおよそ考えられない。文化継承の観点からも、注釈語句であるべきである。またさらに、この「屑朮」の直前にある、「棒をかる」という表現も、そのまま理解できる学習者は少ないであろう。合わせて教師が説明するためにも、「屑朮」の注釈がほしい。

「候」(e)は、作品冒頭部で使用される（「もう真冬の候であった」）。「真冬」の語で季節そのものは理解できる。ただし、季節を書き言葉で言い表すのに「-の候」という表現があることを知らない学習者は多いはずである。改まった手紙を書く場面などで実際に学習者に使えるようになってほしい表現でもある。学習語句として、少なくとも辞書を用いることはさせたい語である。また同じ段落で、真冬の空が「鉛色」(e)であるとされている。鉛の色、質感が、真冬の空の寒々しさを表現しているとともに、併せて、久しぶりの故郷を訪れる「私」の心情も映していると言える。また加えて、類似した色の表現として、作品後半に「薄墨(d)色」という語が使われる（「兩岸の緑の山々は、たそがれの中で薄墨色に変わり」）。故郷を陰鬱な気持ちで離れる

「私」の心情と重なる描写である。こうした情景理解のために、この「鉛色」や「薄墨色」の語を正しく理解させる必要がある。学習語句として脚注欄に示すのがふさわしいと考える。「薄墨」は芸術（書道）の教科書に多く出現する語である。さらに「薄墨」は、「薄墨衣」などの語句で、今後の古典学習で学習者が出会う可能性のある語である。ぜひここで立ち止まらせておきたい。

「結わえる」(d)の語は、新出音訓の語として、全ての教科書の脚注欄に提示されている。漢字の読みの対象となっている語だが、レベル判定で考えると、学習者がこの語自体を知らない可能性もある。本稿では述べるに至らないが、漢字指導と語彙指導の連関を図るという観点からも、学習者の理解を確認する必要がある語であると言える。またレベル下位の語の中には、一件平易に思われる動詞や形容詞も見られる。それら全てを脚注欄に示すことはできない。しかし、大人の側の思い込みでやり過ぎすのではなく、果たして学習者が理解しているのかどうかを確認していく必要があるだろう。

## 6. 今後の課題

課題を多く残したまま紙面が尽きることになった。別の機会に「故郷」の語彙について改めて取り上げ、本稿に続けて次のことについて論じたい。

- ・語彙レベルの高い語（a～c）の提示と考察
- ・新出漢字（読み・書き）の用例比較と考察
- ・語彙の特徴を生かした授業展開案の作成

語彙指導と同様、漢字指導についてもいまだ体系ができていない。中学校で学年別に指導すべき常用漢字を定め、その用例を選定したいと考えている。並行して、本稿のような教材において指導すべき語彙の研究を進め、それらを統合し、大きな漢字・語彙指導法の体系の構築に取り組みたいと考えている。

こうした取り組みは、冒頭で示したように、言語政策班による国語政策、国語教育分野への言語コーパスの活用研究を緒としている。年々、国語教育学界でのコーパスの認知度は高まってきていると感じている。これからはコーパスを活用した、より具体的で実践的な成果を発表していくつもりである。本稿は言わば、国語教育におけるコーパス活用研究の第2ステージの入り口にある。

[謝辞] 本研究はJSPS 科研費25381226の助成を受けたものです。

[2013. 9. 26 受理]